慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジェンダーの社会心理学
Sub Title	Social psychology of gender
Author	三井, 宏隆(Mitsui, Hirotaka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1986
Jtitle	哲學 No.83 (1986. 11) ,p.287- 316
JaLC DOI	
Abstract	In this paper, recent studies on sex and gender are reviewed in terms of three major approaches, which are modelled after Deaux's typology. That is, [○!a] Sex as a subject variable (Sex differences), [○!b] Sex as a social category (Gender stereotypes), [○!c] Individual differences in masculinity, femininity and androgyny (Personality differences). The findings are summarized as follows; (1) Sex-of-subject differences are less pervasive than many have thought, (2) There is some degree of consensus concerning the types of characteristics associated with one sex versus the other. (3) The unique contribution of androgyny, in the sense of a construct with emergent properties, has yet to be demonstrated.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000083-0287

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジェンダーの社会心理学

三　井　宏　隆*

Social Psychology of Gender

Hirotaka Mitsui

In this paper, recent studies on sex and gender are reviewed in terms of three major approaches, which are modelled after Deaux's typology. That is, ⓐ Sex as a subject variable (Sex differences), ⓑ Sex as a social category (Gender stereotypes), ⓒ Individual differences in masculinity, femininity and androgyny (Personality differences). The findings are summarized as follows; ① Sex-of-subject differences are less pervasive than many have thought. ② There is some degree of consensus concerning the types of characteristics associated with one sex versus the other. ③ The unique contribution of androgyny, in the sense of a construct with emergent properties, has yet to be demonstrated.

* 慶應義塾大学文学部助教授（人間科学）

1. 序　　論

男と女．生物学的には区別は容易であっても，それを指摘するだけでは両者に関わる今日的な問題の解決にはならない．何故ならば，人間行動においては生物学的な特質によって説明される部分よりも，社会・文化の相違によって説明される部分の方が大きいからである．

無論，その際にはどのレベルでの行動が問題となっているかを明確にしておくことが必要である．ときには男と女が自分たちとは正反対の役割を担っているようにみえる社会もあるからである．

それではこうした男と女の問題に社会・文化的な視点を導入した場合，どのような問題解決の方向が見出されるのであろうか．

男と女を取りまく社会，経済，政治的条件が異なることはつとに指摘される所であり，近年その不平等を糾弾し，是正を求める運動が活発に展開されている．しかしながら，それらの主張の多くは男社会における性差別の不合理を指摘することに急であるために，理念が先走りしすぎているようにも思われる．たとえば，「男と女の間には本質的な差異はない」との主張を取りあげた場合，それは両者の在るべき姿を意図したうえでの発言なのか，それとも何らかのデータに基づいた発言であるのかが曖昧であるために，却ってその真意をめぐって混乱を招く結果ともなっている．

こうした状況において，心理学者に求められていることは男と女に関する諸説のなかで，何が正しくて，何が誤りであるかをデータに基づいて明らかにすることであり，それによって議論に際しての共通の土俵を準備することである．無論，そうした作業は容易ではないことから，手始めに関連用語の整理が必要かと思われる．まず生物学的な雄，雌を示すものが性(sex) であり，この性に対応する形で現われる心理的な特徴，社会・文化的な期待を表わすものがジェンダー (gender) である．

Ehrhardt, A. A. (1985) によれば，このジェンダーという概念の導入は

John Money (1955) に始まるものであるが，それによって㋑ gender role, gender identity といった観点からの性の問題へのアプローチが可能となったこと，㋺gender identity の規定因として生後の両親の sex assignment とその後の育て方が重視されるようになったこと，が指摘されている．

また，Unger, R. K. (1979) は，ジェンダーを男（女）に期待される社会・文化的特性，特質と定義しており，性 (sex) という言葉が与える生得的，運命的といったニュアンスを避けるために採用されるようになった，とも述べている．

具体的には，男であるか女であるかを判断基準にして2グループを作り，或る課題について両者の結果を比較した場合，それは性差 (sex difference) の研究である．一方，男であるか，女であるかによって当人の能力評価が異なるかどうかを問題とする場合，それはジェンダーの研究ということになる．

Ruble & Ruble (1982) によれば，“sex-role stereotype” は特定の状況において男と女に求められる役割行動が異なることを示す術語であり，“sex stereotype” とは男と女の個人的属性に関わる人びとの信念（思い込み）に言及したものである，と説明されている．(注1)

こうした観点から，Deaux, K. (1984) は性及びジェンダーに関する研究を次の3つに分類した．①被験者が男であるか，女であるかということが問題にされる場合 (sex as a subject variable), ②男らしさ，女らしさといった個人差が問題にされる場合 (masculinity, femininity, androgyny), ③社会的カテゴリーとしての性が問題にされる場合 (sex as a social category) である．

(注1)　但し，Williams & Best (1982) は Sex Role と Sex Stereotype を区別する一方で，後者を Sex-role Stereotype と Sex-trait Stereotype に分けている．たとえば，「建設労働者は女よりも男に多い」(Sex Role) ということは，「建設関係の仕事は本来男性の仕事である」(Sex-role Stereotype) こととして説明され，それはまた「男は力が強く，頑健であるから」(Sex-trait Stereotype) という特性に帰属される．(p. 16)

本稿ではこの分類に従って関連研究を取りあげていくことにするけれども，その順序については多少の変更を行なうことにする．

2. 性差について

心理学のなかで男であること，女であることが問題となる分野の1つが性差の研究である．そこでは同一の課題を遂行した場合，男と女の間にどのような差異が見出されるのか，そうした差異をもたらす原因は何か，といったことが研究テーマとされてきた．

この点についての基本的な文献が Maccoby & Jacklin (1974) の“The Psychology of Sex Differences”である．彼等は1966～73年にかけて発表された約1,600の研究結果を検討したうえで，次のような結論を下した．①従来，“女の子は男の子よりも社交的である”とか，“女は騙されやすい”とか言われてきたが，それらの多くは根拠のないものであること，②しかしながら，次の点で性差を無視できないこと．即ち，㋑女の子は言語能力 (verbal ability) において優れていること，㋺男の子は数量を扱う能力 (quantitative ability) において優れていること，㋩男の子は視覚—空間能力 (visual-spatial ability) において優れていること，㋥男は女より攻撃的であること，の4点である．

但し，Block, J.H. (1976) はこの結論に批判的である．また，Hyde, J.S. (1981) は性差を持出すことによって説明可能となる部分が重要であるとの立場から，Maccoby & Jacklin が使用した文献に基づいてメタ分析を実施し，その結果から性差によって説明しうる範囲は非常に小さいことを明らかにした（全分散の1～5％）．さらに Rosenthal & Rubin (1982) は Hyde のデータに基づき，①どの能力を取りあげるかによって性差の占めるウェートが異なること，②近年の傾向として，女性の能力向上が目立つこと，を指摘している．

こうしてみると，性差の研究は男女の差異よりも類似性を強調している

ように思われるが，Maccoby & Jacklin が取りあげなかった分野についてはどうであろうか．

Eagly, A. H. (1978) は「女性は男性よりも他者からの影響を受けやすい (influenceability)」との命題を取りあげて，それまでの説得，同調性に関する研究の文献展望を行なった．その結果，①集団圧力を伴う事態での同調性の実験において，女性は他者からの影響をうけやすいこと，②単純な説得実験や集団圧力を伴わない事態での同調性の実験の場合には，性差が報告されていないこと，③この種の研究においては実験がどのような事態で行われたのか，そこではどのようなテーマが使用されていたか，といった社会的文脈に注意を払わねばならないこと，が明らかにされた．具体的には，「女性の方が他者からの影響をうけやすい」との結果を報告した実験のほとんどが1970年以前に行われていること，などである．

この点について，Eagly & Carli (1981) は関連研究のメタ分析を通じて，①Influenceability が性差の要因によって説明される度合は非常に小さいこと，②むしろ実験の行われる文脈が問題であり，たとえば実験者が男性である場合に性差を報告する研究が増加していること，を指摘した．

さらに Eagly & Wood (1982) は，「㋑女性の方が影響されやすいのは男性と比べて社会的地位が低いためである，㋺社会的地位が低ければそれだけ他者からの影響をうけやすい」との仮説に基づいて一連の実験を行なった．被験者は一方が他方に自らの望む行動をとらせようと説得している

表 1. Mean Likelihood of Recipient's Behavioral Compliance

Sex of dyad members	Same Organization	Different Organization
Male Communicator / Female Recipient	9.22	5.66
Female Communicator / Male Recipient	6.66	5.67

㊟ 高い数値は compliance を示す．(Eagly & Wood, 1982, p. 924 より引用)．

場面を記述した小冊子を読んだうえで，その説得がどの程度効果をあげえたかの判断を求められた．その結果，①一般に男性は女性よりも高い地位を付与されること，②両者が同じ組織に所属している場合にのみ，女性は男性の指示に従うと判断されること，が示された（表1）．

但し，Riordan, C. (1983) は，大学生及び小学校5年生の男女をペアにした課題解決実験において，男女は対等の立場で行動していたことを報告しており，男であることが直ちに高地位をもたらすものではないと述べている．

一方，Frodi, Macaulay & Thome (1977) は「成人男性は成人女性よりも攻撃的である」との命題に基づいて関連研究を展望した所，そうした命題を支持する結果は得られなかったと述べている．たとえば，何らかの形で攻撃行動の測定がなされていた72個の実験結果を取りあげて分析した所，その61％において性差が見出されなかったと報告している．

Hall, J. A. (1978) は「女性の勘は鋭い」などと言われるように，非言語的コミュニケーションの解読能力において性差がみられるのかどうかを75の関連研究に基づいて検討した．その結果からは，①女性の方が解読能力において優れていること，②特に視覚的な手掛りと聴覚的手掛りの両方が与えられた状況において，性差が顕著に現われること，が見出された．

Stier & Hall (1984) は相手に接触する (touch) という相互作用の手段において，性差がみられるかどうかについての文献研究を行なった．その結果からは，①タッチの開始は女性から男性へという傾向がみられること，②同性同士では，女性の方がお互いにタッチしあう傾向が強いこと，③異性同士よりも同性同士においてより多くタッチしあう傾向が強いこと，④女性の方がタッチされることに対してより好意的な反応を示すこと，が明らかにされた．

また，話し言葉にみられる性差については Haas, A. (1979) と Jay, T. B. (1980) の文献研究があるけれども，Haas が性差の有無には慎重な構え

をとっているのに対して，Jay は特に汚ない言葉の使用において性差がみられることを指摘している．

Belle, D. (1985) はこうした性差に関する研究を概観したうえで次のように述べている．①性差を認めた研究よりもそれを否定する研究の方が多いにもかかわらず，性差という概念を放棄しようとしないのは2つの対象が存在するときには（たとえば，男と女），その間に差異を見つけ出そうとする人間心理に基づいているからである．②また，性 (sex) だけを独立変数として操作する実験デザインの採用は，否応なしに性差を見出そうとする実験者の心理と結びつくこととなり，そのことが結果的に性差を認める報告書の水増しをもたらしている，といった具合である．

但し，これによって性差を“人為的な現象”と断言することは時機尚早かとも思われる．

3．性に基づくステレオタイプ

「彼は男だから，彼女は女であるから」といった台詞には，性に対するステレオタイプが見え隠れしている．

たとえば，Broverman, Broverman, Clarkson, Rosenkrantz & Vogel (1970) は臨床家に122項目からなる Sex Role Stereotype Questionnaire を提示して，「社会的にも人間的にもすぐれた人物（性別は不明）」を記述するように求めた所，その描かれた人物像は同様な教示のもとに記述された理想の男性像に酷似しており，理想の女性像とは明らかに異なることが見出された．

また，Broverman, Vogel, Broverman, Clarkson & Rosenkrantz (1972) は性別，年令，宗教，教育といった社会的条件の相違にもかかわらず，多くの人びとが好ましい男性の性格特性としてあげていたものは“competence”という次元でまとめられるものであり（独立的，客観的，行動的，競争的，論理的など），好ましい女性の性格特性とされたものは

表 2. Stereotypic Sex-Role Items

Competency Cluster: Masculine pole is more desirable

Feminine	Masculine
Not at all aggressive	Very aggressive
Not at all independent	Very independent
Very emotional	Not at all emotional
Does not hide emotion at all	Almost always hides emotions
Very subjective	Very objective
Very easily influenced	Not at all easily influenced
Very submissive	Very dominant
Dislike math and science very much	Likes math and science very much
Very excitable in a minor crisis	Not at all excitable in a minor crisis
Very Passive	Very active
Not at all competitive	Very competitive
Very illogical	Very logical
Very home oriented	Very worldly
Not at all skilled in business	Very skilled in business
Very sneaky	Very direct
Does not know the way of the world	Knows the way of the world
Feelings easily hurt	Feelings not easily hurt
Not at all adventurous	Very adventurous
Has difficulty making decisions	Can make decisions easily
Cries very easily	Never cries
Almost never act as a leader	Almost always act as a leader
Not at all self-confident	Very self-confident
Very uncomfortable about being aggressive	Not at all uncomfortable about being aggressive
Not at all ambitious	Very ambitious
Unable to separate feelings from ideas	Easily able to separate feelings from ideas
Very dependent	Not at all dependent
Very conceited about appearance	Never conceited about appearance
Thinks women are always superior to men	Thinks men are always superior to women
Does not talk freely about sex with men	Talks freely about sex with men

Warmth-Expressive Cluster: Feminine pole is more desirable

Feminine	Masculine
Doesn't use harsh language at all	Use very harsh language
Very talkative	Not at all talkative
Very tactful	Very blunt
Very gentle	Very rough
Very aware of feelings of others	Not at all aware of feelings of others
Very interested in own appearance	Not at all interested in own appearance
Very neat in habits	Very sloppy in habits
Very quiet	Very loud
Very strong need for security	Very little need for security
Enjoys art and literature	Does not enjoy art and literature at all
Easily expresses tender feelings	Does not express tender feelings at all easily

(Broverman etal., 1972, p. 63 より引用).

"Warmth & Expressiveness" という次元でまとめられるものであった(優しさ，他者の感情に敏感である，信仰にあつい，清潔な，物静かな，など)，と述べている（表2）.

但し Block, J. H. (1973) は同一社会での男女の比較はそこに相異点を見出すことになりやすいと指摘したうえで，自らが実施した6ケ国（ノルウェー，スウェーデン，デンマーク，フィンランド，イギリス，アメリカ）の男女大学生を対象とした調査結果に基づき ("kind of person I would most like to be" を問うたもの)，アメリカの女子学生は他の5ケ国の女子学生と比較して，男性的特性を強調する傾向が顕著であることを明らかにした.

Williams & Best (1982) は25ケ国の男女大学生を被験者としたうえで300個の形容詞を提示し，それぞれの社会においてどの形容詞が男性及び女性を意味するかについての回答を求めた．その結果，どの国の人びとも一致して男性を意味するものと判断した形容詞は6個であり (adventurous, dominant, forceful, independent, masculine, strong)，女性を意味するものとしたのは3個であった (sentimental, submissive, superstitious)．また，25ケ国のうち19ケ国以上の人びとが一致して認めたものは，男性に関するものが49個，女性に関するものが25個であった（表3）.

ところで，こうした性 (sex) に基づくステレオタイプに対して肝心の女性たちはどのような反応を示しているのであろうか.

たとえば，Helmreich, Spence & Gibson (1982) は，性役割態度を測定する Attitudes Toward Women Scale の簡略版を 1972, 1976, 1980 年度入学の男，女新入生に実施した．その結果によると，男女とも，1972年から76年にかけて，egalitarianism の方向への態度変化を示していたが，1976年から80年にかけて，その動きは頭打ちとなり，女子学生の場合には保守的方向への回帰すら見出された，と報告している(附表1を参照).

Dambrot, Papp & Whitemore (1984) は43名の女子学生と彼女たちの

表 3. Items associated with Males or with Females

Male-associated items (N=49)

Active (23)	Adventurous (25)	Aggressive (24)
Ambitious (22)	Arrogant (20)	Assertive (20)
Autocratic (24)	Boastful (19)	Clear-thinking (21)
Coarse (21)	Confident (19)	Courageous (23)
Cruel (21)	Daring (24)	Determined (21)
Disorderly (21)	Dominant (25)	Egotistical (21)
Energetic (22)	Enterprising (24)	Forceful (25)
Hardheaded (21)	Hardhearted (21)	Humorous (19)
Independent (25)	Ingenious (19)	Initiative (21)
Inventive (22)	Lazy (21)	Logical (22)
Loud (21)	Masculine (25)	Obnoxious (19)
Opportunistic (20)	Progressive (23)	Rational (20)
Realistic (20)	Reckless (20)	Robust (24)
Rude (23)	Self-confident (21)	Serious (20)
Severe (23)	Stern (24)	Stolid (20)
Strong (25)	Unemotional (23)	Unkind (19)
Wise (23)		

Female-associated items (N=25)

Affected (20)	Affectionate (24)	Anxious (19)
Attractive (23)	Charming (20)	Curious (21)
Dependent (23)	Dreamy (24)	Emotional (23)
Fearful (23)	Feminine (24)	Gentle (21)
Kind (19)	Meek (19)	Mild (21)
Pleasant (19)	Sensitive (24)	Sentimental (25)
Sexy (22)	Shy (19)	Softhearted (23)
Submissive (25)	Superstitious (25)	Talkative (20)
Weak (23)		

㊟ ここにあげられたのは調査対象25ケ国中19ケ国以上の一致をえたものである．
（ ）内は一致した国の数を示す．(Williams & Best, 1982, p. 77 より引用).

母親及び母方の祖母の3世代に対して55項目からなる Attitude Toward Women Scale (AWS) を実施した．その結果からは，①当然のことながら，女子学生が最もリベラルで，祖母たちが最も保守的であったこと，②学生と母親，母親と祖母の間では AWS の得点間に有意な相関が見出されたが，学生と祖母の間にはそうした関係は見出されなかったこと，③AWS 得点の予測因子としては年令と教育水準が有効であったが，年令はリベラルな態度と負の相関を示し，教育水準は正の相関を示すこと，が明らかにされた．

一方，Quarm, D. (1983) は1974～78年度にかけて実施された社会調査の結果を再分析して (National Opinion Research Center)，①性役割態度の予測変数としては年令と教育水準が有効であること，②多くの調査項目において年輩の人びとと同様，若い人びとの間でも性差は見出されなかったこと，③性差がみられた項目は両世代ともに育児に関する項目であったこと，を報告している．

他方，Shapiro & Mahajan (1986) は1960～80年代にかけて実施された世論調査の結果を再分析し，政治態度や行動において“gender gap”が見出されることを指摘した．特に銃砲の規制や死刑制度の廃止などをめぐる問題に関しての男女の意見の相違が大きいこと，こうした傾向が現われたのはレーガン政権のときからであり，また女性運動の高揚とも関係があると述べている．

4．社会的カテゴリーとしての性

たとえ同じことをしても，行為者が男であるか，女であるかによって周囲の人びとの受けとめ方も異なってくる．このような場合，そうした行為を目撃したり，彼等と行動を共にしたりすることは必要でなく，男か女かという情報だけで十分である．このことは性に基づくステレオタイプが人びとの行動に強い影響力を及ぼしていることを示すものである．

Goldberg, P. A. (1968) は女子学生に数篇の短かい論文を提示し，その評価を求めた．彼女らに与えられた情報はその著者が男か女かということだけであった．実験結果は，「論文の著者が男である」と告げられたときの方がより高い評価を与えられることを示していた．

さらに Pheterson, Kiesler & Goldberg (1971) は女子学生を被験者として絵の評価を求めた所，同様の結果が得られたと報告している．

これに対して，Deaux & Taynor (1973) は男女学生を被験者とする一方で，予めテープに吹き込んでおいた留学試験の面接場面での応答に基づいて，被面接者の知能と能力を評価するように求めた．その際に，㋑被面接者の性別，㋺留学条件に照らした場合の被面接者の資格，が独立変数として操作された．実験結果からは，①高資格条件においては，男性の被面接者は女性の被面接者よりも能力及び知能が高いと判断されること，②低資格条件では，逆に男性は女性よりも能力，知能が低いと判断されること，③こうした判断的傾向は被験者が男であるか女であるかにかかわりなく見出されること，が示された．

Deaux & Emswiller (1974) は男女の大学生を被験者として，スクリーンに写し出された物品が何であるかを識別する課題において，平均以上の成績をあげた男女の実験参加者のパフォーマンスを評価するように求めた．その結果は①課題が男性にとってなじみ深い物品で構成されていた場合，男女の実験参加者の成績が同じであったとしても，男性の実験参加者はより高い能力 (ability) の持主であると判断され，女性の実験参加者の高成績は多分にツキ (luck) によるものと判断されたこと，②課題が女性になじみの深い物品で構成されていた場合には，成績が同じであっても男女によるそうした評価の相違は見出されなかったこと，などである（図１）．

この結果について，Deaux, White & Farris (1975) は男性は本来 skill を必要とする課題を好み，女性は luck に左右されやすい課題を好むとの知見を報告しているが，Karabenick, Sweeney & Penrose (1983) はむし

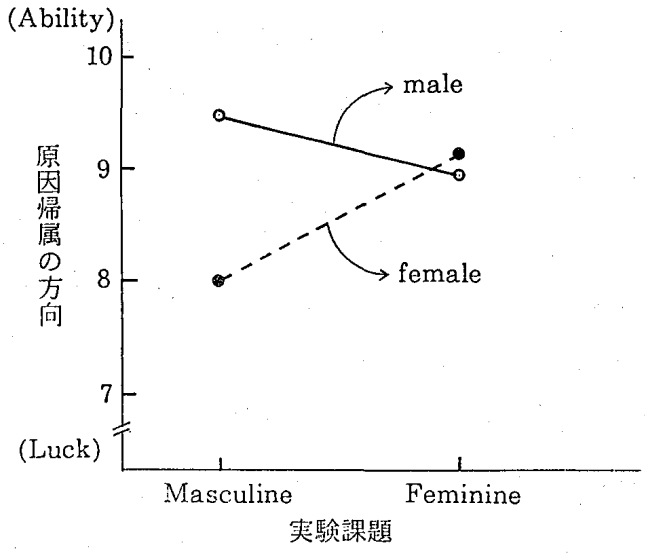

図 1. 実験参加者の性別と課題の内容に応じた原因帰属の方向
(Deaux & Emswiller, 1974, p. 82 より引用)

ろそれは課題の性質によるものであり，女性であっても成功の確率が高い場合には skill を必要とする課題を好むことを指摘した.

他方，この問題については帰属理論の立場からの研究が盛んに行われている. たとえば Feather & Simon (1975) は女子学生を被験者にして，「ジョン（アン）は1学期が終了した時点で医学部生のなかで最高の成績（最低の成績）であった」といった文章とともに，その人物が就職試験に合格したかどうかという情報を与えたうえで，当該人物の評価を求めた. 独立変数は当該人物の性別，所属学部，成績の良し悪しであった. その結果，①合格した男性は不合格の男性よりも高く評価される傾向があること，②しかしながら，合格した女性については不合格の女性よりも低く評価される傾向があること，が明らかにされた.

ところで，Rosenfield & Stephan (1978) は自分自身が課題を遂行する場合と，他者のパフォーマンスを評価する場合とでは原因帰属の仕方が異なるのではないかと考えた. そこで被験者自身（男女大学生）に作業課題を実際に行なうように求め（同一課題を男性向き，女性向きとして提示），

その作業成績を操作した（成功と失敗）．その結果，①課題が男性向きとされた場合，男性は女性よりも成功を内的要因に帰属させ，失敗を外的要因に帰属させること，②しかしながら，課題が女性向きとされた場合，「女性は失敗を内的要因に帰属し，成功を外的要因に帰属する」との従来の知見は否定され，女性は男性よりも成功を内的要因に，失敗を外的要因に帰属していたこと，③課題に対する自我関与度が高い場合には，男性も女性も原因帰属の仕方には相違がないこと，が明らかにされた．

また，被験者自身の態度が原因帰属の仕方に影響を与えることはGarland & Price (1977) の実験結果が示す所である．即ち，被験者が女性管理職に対してポジティブな態度をもつかどうかということが (Women as Manager Scale によって測定)，管理職として成功した女性の行動を評価する場合の原因帰属の仕方に差異をもたらすことが明らかにされた．

また，Zanna & Pack (1975) は，相手の男性が好ましい人物であると思い込んでいる女子学生は，その男性がイメージする女性像に自分を適合させるように態度を変化させていく，との実験結果を報告している．

Skrypnek & Snyder (1982) は性ステレオタイプの永続化の一例として，お互いに相手の顔が見えない状況において「相手方は男または女である」と告げられた被験者（男性）はそうした思い込みに基づいて相手に働きかけをする結果，相手方も次第にその期待に沿うような形で反応するようになったと述べている．

以上のように，情報が乏しいほど男か女かという手掛りが人びとの判断を左右することが明らかにされた．但し，Wallston & O'Leary (1981) によれば，その度合は刺激属性の主効果として取り出される程大きくはなく，その多くは判断事態という社会的文脈との交互作用効果として見出されることが指摘されている．たとえば，これまで男の職場とされていた所へ配属された女性は，一般的に女性の職場とされている所に配属された場合と比べて，否応なしに自分が女であることを意識せざるをえないことになる

が，これは文脈効果の一例とみなされる．

5. Masculinity, Femininity, Androgyny

“A でなければ Non-A である”ように，人間社会においても“男でなければ女である”のが当然とされてきた．そこには理想的な男性から理想的な女性に至る一次元両極尺度が想定されており，人びとはその両端のどこかに位置づけられるものとされてきた．この種の尺度は一般に MF 尺度とよばれるものであり，Terman & Miles (1936) の Attitude-Interest Analysis Test (M-F Test), Strong (1936) の Masculinity-Femininity (MF) Scale of the Vocational Interest Blank, Hathaway & McKinley (1943) の Minnesota Multiphasic Personality Inventory Masculinity-Femininity Scale (Mf), Gough (1952) の The Femininity (Fe) Scale, Guilford etal., (1936) の The Masculinity (M) Scale, などが代表的なものである．

これらはいずれも成人を対象としたものであるが，Constantinople, A. (1973) はそうした MF 尺度に対して次のような批判を行なった．①これまでの研究結果をみるかぎり，MF 尺度を一次元両極尺度とみなすことはできないこと，②Masculinity の尺度と Femininity の尺度は別物と考えた方がよいこと，③MF 尺度の妥当性の根拠として性差を持出すことは適切でないこと，などである．

さらには近年の女性運動を背景としてか，MF 尺度が伝統的な男性社会の価値観を反映したものであるとの批判もあり，新たな観点からの尺度構成が求められることになった．そうしたなかで Bem, S. L. (1974) は，㋑多くの人びとは男性的側面と女性的側面をあわせもつ“androgynous”な存在であること，㋺従来好ましい男性及び女性のタイプとされてきた男性的側面及び女性的側面を強くもつ人 (sex-typed) は，そうした性役割へのこだわりからか，状況に応じた役割行動をとることが難しくなるために

却って不適応に陥りやすいとの仮説に基づき，新たに Bem Sex-Role Inventory (BSRI) の作成に取りかかった．その尺度構成の手続は次の通りである．①Masculinity, Femininity 尺度の予備項目として男性及び女性にとってポジティブと評価されている性格特性を約200個集める．②Social desirability を測定する項目として，男性，女性いずれのニュアンスももたないが (neutral)，評価方向としてはポジティブ，ネガティブである性格特性を約 200 個集める．③これら 400 個近くの性格特性について，男性或いは女性にとっての desirability の観点から 7 段階評定を求める．具体的には，“In American society, how desirable is it for a men to be truthful ?” という形式で合計100人の大学生（男女各50名）の回答がえられた．④この男女の評定値に基づいて t 検定を行ない，男性及び女性にとって有意にポジテイブな特性と判断されたものをそれぞれ20項目選択し，Masculinity, Femininity 尺度を構成する項目とした．⑤Social desirability 尺度については，男女の評定者によって neutral と判断され，しかも両者の間に有意差がみられなかった項目のなかからポジティブ及びネガティブな方向をもつ特性を10項目ずつ選択し，尺度項目とした．⑥以上の手続により，60項目からなる BSRI が作成された（表 4）．

採点方法は BSRI の各項目が「どの程度自分にあてはまるのか」を自己評定した結果に基づき（7 段階評定），まず Masculinity 得点と Femininity 得点を算出する．次に両得点の差の検定を行ない ($|t| \geq 2.025$, $df = 38$, $p < 0.05$ が目安)，いずれかに有意にズレている場合は，“masculine”，“feminine” と判定し，そうでない場合は “androgynous” と分類する．こうした分類図式に基づき，Bem, S. L. (1975) は “androgynous” と判定された人びとは “masculine” 及び “feminine” とされた人びとよりも状況に応じた役割行動をとることができると報告した．

しかしながら，この BSRI については当初からいくつかの問題点が指摘されていた．たとえば，Strahan, R. F. (1975) は採点基準として t 検定

表 4. Bem Sex-Role Inventory (BSRI)

Items on the Masculinity, Femininity, and Social Desirability Scales of the BSRI (Bem, S. L. 1974, p. 156 より引用).

Masculine items	Feminine items	Neutral items
㊾Acts as a leader	⑪Affectionate	㊺Adaptable
㊻Aggressive	⑤Cheerful	㊱Conceited
㊽Ambitious	㊿Childlike	⑨Conscientious
㉒Analytical	㉜Compassionate	㊵Conventional
⑬Assertive	㊸Does not use harsh language	㊺Friendly
⑩Athletic	㉟Eager to sooth hurt feelings	⑮Happy
㊺Competitive	⑳Feminine	③Helpful
④Defends own beliefs	⑭Flatterable	㊽Inefficient
㊲Dominant	㊾Gentle	㉔Jealous
⑲Forceful	㊼Gullible	㊴Likable
㉕Has leadership abilities	㊻Loves children	⑥Moody
⑦Independent	⑰Loyal	㉑Reliable
㊷Individualistic	㉖Sensitive to the needs of others	㉚Secretive
㉛Makes decisions easily	⑧Shy	㉝Sincere
㊵Masculine	㊳Soft spoken	㊷Solemn
①Self-reliant	㉓Sympathetic	㊼Tactful
㉞Self-sufficient	㊹Tender	⑫Theatrical
⑯Strong personality	㉙Understanding	㉗Truthful
㊸Willing to take a stand	㊶Warm	⑱Unpredictable
㉘Willing to take risks	②Yielding	㊹Unsystematic

㊟ ○の中の数字は BSRI における項目番号を示す.
各被験者は各項目が自分にどの程度あてはまるかを7段階で評定する.

の結果を使用している点を批判し，Gaudreau, P. (1977) は BSRI の因子分析結果に基づいて4因子を抽出するとともに，Masculinity, Femininity の項目なかには適切でないものが含まれていることを指摘した．

さらに Pedhazur & Tetenbaum (1979) は BSRI について，その尺度構成の手続が本来理論的根拠に乏しいものであると批判した．すなわち，①M, F 項目の選択に際しての統計的処理の仕方に問題があること，②Femininity 項目のすべてが必ずしも女性にとってポジティブに評定されていないこと，③因子分析の結果は必ずしも Femininity 因子を抽出していないこと，④BSRI が自己評定法を採用していること，などである．

一方，Spence, Helmreich & Strapp (1975) は Bem とは多少異なる立場から，55項目の Personal Attributes Questionnaire (PAQ) を作成した．それは23の male-valued 項目と18の female-valued 項目，13の sex-specific 項目，1つの未分類項目から構成されており（たとえば very dependent-not at all dependent, very subjective-very objective といった両極尺度），回答者は各項目について5段階で自己評定するように求められた（附表2を参照）．

採点方法は male-valued scale の得点（M 得点）と female-valued scale の得点（F 得点）をそれぞれ算出し，その中央値を用いて回答者全員を4つの類型に分類するというものであった．

その結果，M 得点が中央値以上 (high), F 得点が中央値以下 (low) の者を“masculine”, M 得点が low, F 得点が high の者を“feminine”, M 得点，F 得点が共に high の者を“androgynous”, M 得点, F 得点が共に low の者を“undifferentiated”という分類がなされた．(注2)

なおこの他にも Heilbrun, A. B. Jr. (1976) による Masculinity &

(注 2) “androgynous”の定義に関して，当初 Bem (1974) と Spence ら (1975) の間に意見の相違があったけれども，この点については後に Bem (1977) が Spence らの定義を採用する形で解決された．

Femininity Scale of the Adjective Check List (ACL), Berzins, Welling & Wetter (1978) による PRF ANDRO Scale の作成などの試みがある.

これらはいずれも sex-role style 及び androgyny を測定するものであるが, Kelley & Furman (1978) は BSRI, PAQ, ACL, PRF ANDRO の4つのスケールを取りあげ, 相互の関係を分析した. 被験者は大学生130名（男女各65名）とし, 彼等にこれらのテストを実施した. 次いで各スケールの M, F 得点に基づき相関係数を算出した所, M 尺度についてはスケール間の相関の平均が0.71, F 尺度については0.62という数値がえられた. 一方, 各スケールに基づいて類型化された4タイプの一致度は約56%となっており, この一致度をみるかぎり, こうした類型化の手続には疑問があると結論された(表5).

Locksley & Colten (1979) は所謂 "Psychological androgyny" の研究について次のような問題点を指摘している. ① androgyny という概念自体が誤解を招きやすいものであり, 研究者が主張するように単なる便宜的な呼称とはみなされないこと, ② androgyny の測定は特定社会のメンバーに共有される性ステレオタイプの考え方を踏襲しているが, そうした一般的な反応をもって個々人のパーソナリティの測度とすることは適切でないこと, ③ Masculinity, Femininity はそれぞれ Instrumentality と Expressiveness に対応すると考えられているけれども, 実生活においてはそうした固定的な男女の役割行動によって説明される部分は非常に小さいこと, ④androgyny という概念の妥当性を社会的適応や精神的健康度と結びつけて論じる傾向があるけれども, たとえそうした結果が得られたとしても, それは予測妥当性 (predictive validity) を示しているのであり, 構成概念としての妥当性を示していることにはならないこと, ⑤ "androgynous" と分類される人びとは伝統的な性役割概念にこだわることなく, 状況に応じた行動をとりうるとされているが, それは彼等がそうした行動

表 5. Interscale Classification Agreement Rates

Inventories compared	% assigned to same category	% corrected for chance
BSRI/PAQ		
Sexes combined	60.8	37.9
Males	60.0	43.1
Females	61.5	45.9
BSRI/ANDRO		
Sexes combined	55.4	40.0
Males	52.3	28.1
Females	58.5	39.1
BSRI/ACL		
Sexes combined	56.2	42.0
Males	56.9	39.6
Females	55.4	35.7
PAQ/ANDRO		
Sexes combined	51.5	35.9
Males	49.2	28.9
Females	53.8	35.6
PAQ/ACL		
Sexes combined	55.4	40.0
Males	50.8	29.7
Females	60.0	44.0
ANDRO/ACL		
Sexes combined	56.2	42.2
Males	49.2	28.6
Females	63.1	47.4

Note. BSRI=Bem Sex-Role Inventory; PAQ=Personal Attributes Questionnaire; ANDRO=Personality Research Form ANDRO Scale; ACL=Adjective Check List (Kelley & Furman, 1978, p. 1575 より引用).

をとることが社会的に望ましいことであり，報酬をもたらすものであることを知っているためと思われる．人間行動をすべて個人心理に還元して説明するのではなく，人びとの行動を決定している社会的要因についての考察が必要である，という具合である．

この点について，Jones, Chernovetz & Hansson (1978) は「androgynyは果たして社会的適応を意味しているのか」という疑問から，1404名の男女大学生にBSRIを含む一連のテストを実施した．その結果，①男子学生の場合，sex-typedとされるmasculine maleの方がandrogynous maleよりも社会的に適応しているとみなされること，②女子学生の場合にはandrogynous femaleの方がsex-typedとされるfeminine femaleよりも社会的な適応が良かったけれども，内容的にはmasculinityの得点が高くなるほど社会的な適応が良いこと，が見出された．このことから，彼等は重要なことは自らの性に適切な特性や行動を内面化しているかどうかではなく，社会が高く評価する行動（一般的には男性行動）をどの程度取り入れているかどうかである，と主張した．

いずれにしても，androgynyの研究が稔りあるものとなるためには，操作的定義に基づいて進められている実験室での研究結果を絶えず日常場面にフィードバックし，自らの研究の意味を問い直すという作業をルーティン・ワークとして取り入れることが必要と思われる．

6. 結　　論

本稿では現代社会心理学の主要トピックスである性とジェンダーの問題を取りあげた．

Morawski, J. G. (1985) はこの問題について心理学史の立場から次のように述べている．当初，心理学者の関心は性差に向けられており，そこではイデオロギーに彩られた男女に関する所説を科学的心理学の目を通して再検討することが目的とされていた．それはまた，新たに高等教育の機会

を得た女性研究者にとって自らの identity を再確認する作業でもあった．なかでも Thompson Woolley は実験心理学の手法を用いて，知覚，感覚，感情，知的能力についての性差研究を進めることにより，その後の性差研究の方向づけに大きな影響力を及ぼした（1903年）．

これらの研究を通じて明らかにされたことは，性差を実証したものは少なく，なかには女性優位の結果を示したものさえあったということである．たとえば Lewis Terman はビネー・シモン知能検査の標準化の作業のなかで，女の子の方が知的に優れているとの結果を得ていたほどである（1917年）．

しかしながら，多くの研究者はこうした知見にもかかわらず，「性差の神話」を捨てきれずにいたのが実状であった（Woolley, 1914）．

やがて研究者の関心はより社会的・文化的なニュアンスの強い“masculinity”，“femininity”の研究へと向かうことになった．その先鞭をつけたのがTerman & Miles (1936) であった．彼等は男と女を弁別するテスト項目を拾いあげていくことによって，最終的には7つの下位テストをもつ910項目のインベントリー(Attitude-Interest Analysis Test＝AIST)を作成した．こうした尺度の作成を可能としたのは，①masculinity, femininity は一次元の両極尺度として表わされること，②特定の社会において男性（女性）に特有の属性，態度，行動とされているものは，それぞれ masculinity (femininity) の指標とみなしうることから，その有無によって masculinity (femininity) の判定が可能となること，③男性と女性を区別する項目はそれぞれの間で統計的に有意味な相関を示していることから，それらの得点を加算して1つの数値で表わすことが可能である，との暗黙の前提があったためである (Spence, 1984).

その後いくつかの masculinity, femininity の測定尺度が作成されたけれども，基本的な考え方は AIST を踏襲するものであった．

こうして世俗的な価値観（性ステレオタイプ）と心理測定法が結びつい

て出来あがった MF 尺度は人びとを masculinity と femininity を両極とする一次元尺度のうえに位置づけることに成功したわけであるが，それはまた在るべき姿として想定された男女の社会関係を正当化するものであった．何故ならばそこからの逸脱は直ちに社会的不適応，精神的不健康を意味していたからである．(注3)

ところで，こうしたMF尺度が何ら理論的な根拠に基づいたものでないことを指摘したのが Constantinople, A. (1973) である．彼女の批判はMF尺度の信憑性にとどまらず，“masculine”，“feminine”という分類自体を疑問視するものであった．そのようなときに登場したのが Bem, S. L. (1974) の BSRI である．そこでは masculinity と femininity が独立の次元として扱われるとともに，新たに androgyny という概念が導入された．androgyny は人びとに masulinity と femininity の適度の調和を求めるものであり，男であるからとか，女であるからといったことにかかわりなく，状況に応じた役割行動の遂行を求めるものであった．このことはまた，男女の相違を生物学的な側面に限定し，社会・文化的側面に由来する性ステレオタイプを可能なかぎり払拭しようとする feminist 運動とも相通じるものであった．

やがて androgyny という概念が独り歩きを始めると，それに歩調を合わせる形でその神格化の作業が押し進められることになった．その過程では社会的適応，精神的健康，自尊感情といったものが次々と持出されて権威づけに一役買うことになった．しかしながら，それらはいずれも絶対的価値を示すものではなく，他者との比較において意味をもちうるものであったことから，そうした努力も当初期待されたほどの成果をあげるに至らなかったのが実状である．その反動のためか，一度 androgyny というご

(注3) Morawski, J. G. (1985) は MF 尺度の背景には，当時の核家族にみられた男女の社会関係がモデルとしてあること，Androgyny 概念を導入した背景には，自己充足的個人主義 (self-contained individualism) 及び従来の役割意識にしばられない行動を求める企業社会の理念があった，と述べている．

本尊（BSRI, PAQ などの操作的定義）に不信の目が向けられるようになると，それまで隆盛を誇っていた androgyny 信仰もまた，大きく動揺するところとなった．

今日の androgyny 研究の混迷はそうした心理学的アプローチの破綻を示すと同時に，理論構成の段階で masculinity, femininity といった議論を棚上げしようとしたにもかかわらず，自らの正当性の主張をそれらに求めざるをえなかった矛盾が顕在化したためと思われる．

引用文献

Belle, D. 1985 Ironies in the contemporary study of gender. Journal of Personality, 53, 400-405.

Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 42, 155-162.

Bem, S. L. 1975 Sex role adaptability: One consequence of psychological androgyny. Journal of Personality and Social Psychology, 31, 634-643.

Bem, S. L. 1977 On the utility of alternative procedures for assessing psychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 45, 196-205.

Berzins, J. I., Welling, M. A., & Wetter, R. E. 1978 A new measure of psychological androgyny based on the personality research form. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 46, 126-138.

Block, J. H. 1973 Conceptions of sex role: Some crosscultural and longitudinal perspectives. American Psychologist, 28, 512-526.

Block, J. H. 1976 Debatable conclusions about sex differences. Contemporary Psychology, 21, 517-522.

Broverman, I. K., Broverman, D. M., Clarkson, F. E., Rosenkrantz, P. S., & Vogel, S. R. 1970 Sex-role stereotypes and clinical judgments of mental health. Journal of Counselling and Clinical Psychology, 34, 1-7.

Broverman, I. K., Vogel, S. R., Broverman, D. M., Clarkson, F. E., & Rosenkrantz, P. S. 1972 Sex-role stereotypes: A current appraisal. Journal of Social Issues, 28, 59-78.

Constantinople, A. 1973 Masculinity-Femininity: An exception to a famous

dictum? Psychological Bulletin, 80, 389-407.

Dambrot, F. H., Papp, M. E., & Whitemore, C. 1984 The sex-role attitude of three generations of women. Personality and Social Psychology Bulletin, 10, 469-473.

Deaux, K. 1984 From individual differences to social categories: Analysis of a decade's research on gender. American Psychologist, 39, 105-116.

Deaux, K., & Emswiller, T. 1974 Explanations of successful performance on skill-linked tasks: What is skill for the male is luck for the female. Journal of Personality and Social Psychology, 29, 80-85.

Deaux, K., & Taynor, J. 1973 Evaluation of male and female ability: Bias works two ways. Psychological Reports, 32, 261-262.

Deaux, K., White, L., & Farris, E. 1975 Skill versus luck: Field and laboratory studies of male and female performances. Journal of Personality and Social Psychology, 32, 629-636.

Eagly, A. H. 1978 Sex differences in influenceability. Psychological Bulletin, 85, 86-116.

Eagly, A. H., & Carli, L. L. 1981 Sex of researcheres and sex-typed communications as determinants of sex differences in influenceability: A meta-analysis of social influence studies. Psychological Bulletin, 90, 1-20.

Eagly, A, H., & Wood, W. 1982 Inferred sex differences in status as a determinant of gender stereotypes about social influence. Journal of Personality and Social Psychology, 43, 915-928.

Ehrhardt, A. A. 1985 Gender differences: A biosocial perspective. In T. B. Sonderegger. (ed.) Psychology and gender. (Nebraska symposium on motivation. Vol. 32) University of Nebraska Press. p. 37-57.

Feather, N. T., & Simon, J. G. 1975 Reactions to male and female success and failure in sex-linked occupations: Impression of personality, causal attributions, and perceived likelihood of different consequences. Journal of Personality and Social Psychology, 31, 20-31.

Frodi, A., Macaulay, J., & Thome, P. R. 1977 Are women always less aggressive than men? A review of the experimental literature. Psychological Bulletin, 84, 634-660.

Garland, H., & Price, K. H. 1977 Attitudes toward women in management and attributions for their success and failure in a managerial position.

Journal of Applied Psychology, 62, 29-33.

Goldberg, P. 1968 Are women prejudiced against women? Trans-action, 5, 28-30.

Haas, A. 1979 Male and female spoken language differences: Stereotypes and evidence. Psychological Bulletin, 86, 616-626.

Hall, J. A. 1978 Gender effects in decoding nonverbal cues. Psychological Bulletin, 85, 845-857.

Heilbrun, A. B. Jr. 1976 Measurement of masculine and feminine sex role identities as independent dimension. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 44, 183-190.

Helmreich, R. L., Spence, J. T., & Gibson, R. H. 1982 Sex-role attitudes: 1972-1980. Personality and Social Psychology Bulletin, 8, 656-663.

Hyde, J. S. 1981 How large are cognitive gender differences? A meta-analysis using w^2 and d. American Psychologist, 36, 892-901.

Jay, T. B. 1980 Sex roles and dirty word usage: A review of the literature and a reply to Haas. Psychological Bulletin, 88, 614-621.

Jones, W. H., Chernovetz, M. E. O'C., & Hansson R. O. 1978 The enigma of androgyny: Differential implications for males and females? Journal of Consulting and Clinical Psychology, 46, 298-313.

Karabenick, S. A., Sweeney, C., & Penrose, G. 1983 Preferences for skill versus chance-determined activities: The influence of gender and task sex-typing. Journal of Research in Personality, 17, 125-142.

Kelley, J. A., & Furman, W. 1978 Problems associated with the typological measurement of sex roles and androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 46, 1574-1576.

Locksley, A., & Colten, M. E. 1979 Psychological androgyny: A case of mistaken identity? Journal of Personality and Social Psychology, 37, 1017-1031.

Maccoby, E. E., & Jacklin, C. N. 1974 The psychology of sex differences. Stanford University Press.

Morawski, J. G. 1985 The measurement of masculinity and femininity: Engendering categorical realities. Journal of Personality, 53, 196-223.

Pedhazur, E. J., & Tetenbaum, T. J. 1979 Bem Sex Role Inventory: A theoretical and methodological critique. Journal of Personality and

Social Psychology, 37, 996-1016.

Pheterson, G. I., Kiesler, S. B., & Goldberg, P. A. 1971 Evaluation of the performance of women as a function of their sex, achievement, and personal history. Journal of Personality and Social Psychology, 19, 114-118.

Quarm, D. 1983 The effect of gender on sex-role attitudes. Sociological Focus, 16, 285-303.

Riordan, C. 1983 Sex as a general status characteristic. Social Psychology Quarterly, 46, 261-267.

Rosenfield, D., & Stephan, W. G. 1978 Sex differences in attributions for sex-typed tasks. Journal of Personality, 46, 244-259.

Rosenthal, R., & Rubin, D. B. 1982 Further meta-analytic procedures for assessing cognitive gender differences. Journal of Educational Psychology, 74, 708-712.

Ruble, D. N., & Ruble, T. L. 1982 Sex stereotypes. In A. G. Miller (ed.) In the eye of the beholder: Contemporary issues in stereotyping. Praeger. p. 188-253.

Shapiro, R. Y., & Mahajan, H. 1986 Gender differences in policy preferences: A summary of trends from the 1960 s to the 1980 s. Public Opinion Quarterly, 50, 42-61.

Skrypnek, B. J., & Snyder, M. 1982 On the self-perpetuating nature of stereotypes about women and men. Journal of Experimental Social Psychology, 18, 277-291.

Spence, J. T. 1985 Gender-identity and its implications for the concepts of masculinity and femininity. In T. B. Sonderegger (ed.) Psychology and gender (Nebraska symposium on motivation. Vol. 32). University of Nebraska Press. p. 59-95.

Spence, J. T., Helmreich, R., & Stapp, J. 1975 Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. Journal of Personality and Social Psychology, 32, 29-39.

Stier, D. S., & Hall, J. A. 1984 Gender differences in touch: An emprical and theoretical review. Journal of Personality and Social Psychology, 47, 440-459.

Strahan, R. F. 1975 Remarks on Bem's measurement of psychological androgyny: Alternative methods and a supplementary analysis. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 43, 568-571.

Terman, L. M., & Miles, C. C. 1936 Sex and personality. McGraw-Hill.

Unger, R. K. 1979 Toward a redefinition of sex and gender. American Psychologist, 34, 1085-1094.

Wallston, B. S., & O'Leary, V. E. 1981 Sex makes a difference: Differential perceptions of women and men. In L. Wheeler (ed.) Review of personality and social psychology. Vol 2. Sage. p. 9-41.

Williams, J. E., & Best, D. L. 1982 Measuring sex stereotypes: A thirty nation study. Sage.

Woolley, H. B. T. 1914 The psychology of sex. Psychological Bulletin, 11, 353-379.

Zanna, M. P., & Pack, S. J. 1975 On the self-fulfilling nature of apparent sex differences in behavior. Journal of Experimental Social Psychology, 11, 583-591.

附表 1. Attitude Toward Women Scale の簡略版 ⓐ

① Swearing and obscenity are more repulsive in the speech of a woman than a man.

② Under modern economic conditions, with women active outside the home, men should share in household tasks such as washing dishes and doing the laundry. ⓑ

③ It is insulting to women to have the "obey" clause remain in the marriage service. ⓑ

④ A woman should be as free as a man to propose marriage. ⓑ

⑤ Women should worry less about their rights and more about becoming good wives and mothers.

⑥ Women earning as much as their dates should bear equally the expense when they go out together. ⓑ

⑦ Women should assume their rightful place in business and all the professions along with men. ⓑ

⑧ A woman should not expect to go to exactly the same places or to have quite the same freedom of action as a man.

⑨ Sons in a family should be given more encouragement to go to college than daughters. ⓑ

⑩ It is ridiculous for a woman to run a locomotive and for a man to darn socks. ⓑ

⑪ In general, the father should have greater authority than the mother in the bringing up of children.

⑫ The intellectual leadership of a community should be largely in the hands of men.

⑬ Economic and social freedom is worth far more to women than acceptance of the ideal of femininity which has been set up by men. ⓑ

⑭ There are many jobs in which men should be given preference over women in being hired or promoted.

⑮ Women should be given equal opportunity with men for apprenticeship in the various trades. ⓑ

㊟ ⓐ Each item was scored on a 4 point scale with 0=strongly agree and 3=strongly disagree.

ⓑ This item was recorded such that liberal score is highest.

(Helmreich, Spence & Gibson, 1982, p. 659-661 より引用)

附表 2. Abbreviated unipolar description of the Personal Attributes Questionnaire items classified as to male valued, female valued, and sex specific.

Male valued (n=23)

Independent	Adventurous	Self confident
Not easily influenced	Outspoken	Feels superior
Good at sports	Interested in sex	Takes a stand
Not excitable, minor crisis	Makes decisions easily	Ambitious
Active	Not give up easily	Stands up under pressure
Competitive	Outgoing	Forward
Skilled in business	Acts as leader	Not timid
Knows ways of world	Intellectual	

Female valued (n=18)

Emotional	Strong conscience	Creative
Not hide emotions	Gentle	Understanding
Considerate	Helpful to others	Warm to others
Grateful	Kind	Likes children
Devotes self to others	Aware, other feelings,	Neat
Enjoys art and music	Tactful	Expresses tender feelings

Sex specific (n=13)

Aggressive (M)	Mechanical aptitude (M)	Religious (F)
Dominant (M)	Needs approval (F)	Home-oriented (F)
See self running show (M)	Loud (M)	Feelings hurt (F)
Like math and science (M)	Needs for security (F)	Cries easily (F)
Excitable, major crisis (F)		

㊟ ( ) の中の M, F はそれぞれに対応した理想的人物の性を示す.
(Spence, Helmreich & Stapp, 1975, p. 31 より引用).